

コロナウイルス（COVID-19）拡大下における遠隔授業 —四国学院大学・新1年生の不安と試行錯誤の日々—

尾場瀬 一郎

— 目 次 —

1. はじめに
2. 新1年生のパソコン環境
3. コロナ禍における新1年生の日常生活
4. オンライン授業はつまらないか
5. 他大学のアンケート結果から
6. おわりに

キーワード：コロナウイルス（COVID-19）、オンライン授業、
対面授業、moodle、ZOOM

1. はじめに

本稿の目的は、四国学院大学新1年生（2020年4月入学）に対しておこなったアンケートをもとに、コロナ禍のなか新1年生たちがどのような状況に置かれ、遠隔授業をどのように受けとめたのかを明らかにし、今後同様の状況に陥ったときにどのような点に留意すればよいのか、一般的準則を提示することにある。

本稿の基礎となった調査は「在宅学習に関するアンケート」であり、アンケートはとくに新1年生を対象にした。その訳は入学して間もない新1年生の方が、比

較的大学生活に慣れている2～4年生よりも、不安や困惑の度合いが高かっただろうと推測されるためである。

四国学院大学では例年、4月の第1週に新1年生対象のオリエンテーションを5日間にわたっておこなう。ただし今年度は、すでにコロナウイルスの感染者が増えつつあったため、3日間に短縮された。その結果新1年生は、十分なオリエンテーションさえ受けることもなく、新生活のなかに放りこまれることになった。

政府が「緊急事態宣言」を全国に拡大したのは、2020年4月16日である。四国学院大学はオリエンテーションの後、コロナウイルスの勢力拡大が止まらないことから、授業開始日を本来予定されていた4月13日から4月20日へ延期した。4月20日から授業が開始されたが、初日から遠隔授業（オンライン授業）ということになった。そして、全国を対象とする「緊急事態宣言」が解除されたのが、5月25日である。四国学院大学は諸対策を講じたうえで、6月1日にオンライン授業から一部対面授業開始に踏みきった⁽¹⁾。オンライン授業がおこなわれたのは実質、5週間ということになる。本報告は、この期間の四国学院大学・新1年生に関するものである。

最初に断っておかなくてはならないのは、本稿執筆の基礎となっているアンケートは、大学による全学的な調査ではなく、筆者が私的におこなったもの⁽²⁾ということである。アンケートをおこなった期間は、6月の第1週と第2週である。すでに述べたように、アンケートの対象は2020年4月に入学した新1年生である。ただ、新1年生全員を対象にしたわけではない（有効回答数103件、有効回答率83%＝新1年生全体の約40%）。そのため、本稿が基礎とするアンケートのサンプル数は少なく、調査結果は代表性に乏しいものになっているかもしれない。そういった意味では、本稿はきわめて限定された報告だということを断っておきたい。

それを補う意味でも、本稿作成に当たって、他大学の調査結果を大いに参考にさせてもらった。秋田大学、九州大学、立命館大学などが、全学生を対象にしたアンケート調査をおこない、結果を公表している。地域や規模など（諸条件）が異なるため、単純な比較は慎まねばならないが、以下の行論ではそれらも参考にしながら、①オンライン授業を受ける環境（PC環境）について、②コロナ禍のなかでの生活について、③オンライン授業の内容評価について、できるだけ学生の生の声を紹介しながら、以上の3点を明らかにしたい。

2. 新1年生のパソコン環境

アンケート用紙の質問事項は全16項目、大きく分けて3つのパートで構成されている。「Ⅰ.ネット・PC関連機器所有状況」、「Ⅱ.遠隔授業と生活」、「Ⅲ.遠隔授業の内容について」である。ここでは「Ⅰ.ネット・PC関連機器所有状況」を中心に見ていきたい。以下で示す件数（例：○件）は、いずれも分母が103件であるが、煩瑣になるので件数・分子のみを記す。

「Ⅰ.ネット・PC関連機器所有状況」のパートは、5つの質問からなっている。そのなかでも重要な個所をピックアップして、結果を紹介したい。

最初に「あなたが今回の遠隔授業に使用したPC関連機器について教えてください」という質問に対する回答から見ていこう。回答結果は、多くの学生がオンライン授業に参加するためにスマートフォンを使ったという回答がもっとも多く（79件・77%）、そのつぎにノート型パソコンがつづいている（69件・67%）。デスクトップ型のパソコンを使ったという回答もあるが、それは19件・18%に止まっている。電子タブレット（ipadなど）を使ったという回答は、13件・13%である。

ここで注目すべきは、新1年生が課題に取り組み、課題を送付する手段としてももっとも多く「使用」したのが、スマートフォンだったということである。⁽⁴⁾これには、さまざまな理由が考えられるが、回答をよく見ると一単純計算になるが一、ノート型パソコンあるいはデスクトップ型パソコン、それから電子タブレットを使用した比率も、とりわけ低いわけではない（ $69+19+13=101$ 件・98%）。それにも関わらず、オンライン授業ではスマートフォンがもっとも多く使用されている。おそらく、学生はスマートフォンと、パソコンあるいは電子タブレットとを両方所有しているが、好んで使用するのはスマートフォンだということになるだろう。レポートや論文をほとんど書いたことのない新1年生からすれば、慣れないパソコンを使用するより、常日頃携帯し、慣れ親しんできたスマートフォンの方が使い勝手がよかったのだと推測される。

学生の多くは、パソコンではなくスマートフォンで課題を確認し、レポートや論文を作成し、課題を送付しているのではないか。つまり、オンライン授業で使われた真の主役は"スマホ"なのではないか。実際、「パソコンがないとできな

い課題もあり苦労した」(Kさん)と自由記述欄に書いた学生もいた。このような学生は、他にもっと⁽⁵⁾いるのではないか。今回のアンケートではその点までは明らかにできなかったが、パソコンの所有率が相対的に高い(85%)にも関わらず、プリンターの所有率が低いのも(32件・31%)、そのことを裏づけているように思う。

それから「今使用しているインターネット接続機器は十分に使えたと思いますか」(前者)、今回「遠隔授業体制になった時、あなたは問題なく対応できたと思いますか」(後者)という質問に対する回答を見てみよう。「十分だった」あるいは「まあ十分だった」と回答したのは、前者79件・66%で、後者は66件・64%だった。それに対して「あまりできなかった」あるいは「できなかった」と回答したのは、前者は21件・20%で、後者は35件・33%だった。3人に1人が、遠隔授業体制への切りかえに困難を感じたのである。もし切りかえの前に“講習”などがおこなわれたならば、困難を感じた学生の数はずっと少なかったのではないだろうか。

「ワードを使った文書作成」能力を問うている項目を見てみよう。これは5段階評価で記入するよう指示した。「できなかった」および「あまりできなかった」と答えた学生は、合計26件・25%に上る。新1年生の4人に1人が、ワードを使って文書を作成できないか、文書作成に困難を感じているということになる。「メールでのやりとり」に関する質問には、「できなかった」と「あまりできなかった」と答えた学生は、24件・23%だった。高い比率の学生がパソコンを所有しているにも関わらず、使用する技能をあまり身につけていないのではないかと、そう考えざるをえない回答結果である。⁽⁶⁾

「ZOOMでの授業参加」に関しても質問した。「できなかった」と「あまりできなかった」という回答は11件・10%だった。「問題なくできた」と「大体できた」は、80件・78%と高かった。それに比べ「moodleを使った課題送付」ができたか否かに関する質問に対しては、「できなかった」と「あまりできなかった」という回答が22件・21%に上った。「問題なくできた」と「大体できた」は52件・50%と、ZOOMの78%に対してかなり低かった。以上の結果から、本学ではZOOMよりmoodle操作の方が苦手な学生が多いことがわかる。

新1年生のなかには、ZOOMにはほぼ対応できるが、ワードで文書を作成した

り、メールを交換したり、moodleを使った課題送付が苦手だという学生が一定数存在するということがわかる。そのいずれも、パソコンを使ってまとまった文書を作成することができないという点に帰着する。

この点に関して筆者は、大学・教職員は"デジタルネイティブ（digital native）世代"という言葉に欺かれてはならないと考える。アンケート結果からもわかるように、"デジタルネイティブ世代"に属する若者たちは、必ずしもパソコンの操作に慣れているとは限らない（"パソコン離れ"）。もちろん、遠隔授業に「十分対応できた」、moodleを使った課題送付を「問題なくできた」と回答した学生も一定数いたが、ワードを使った文書作成が「できなかった」あるいは「あまりできなかった」学生も少なからずいた。スマートフォンは自由に使えても課題のファイル添付ができないという学生も、一定数存在するのだ。

言いかえるならば、スマートフォンを自由に使えるということと、パソコンの操作ができるということは、別問題だということである。また、当然のことではあるが、パソコンを「所有」しているということと、「使用」できるということとは違うということである。

3. コロナ禍における新1年生の日常生活

「Ⅱ.遠隔授業と生活」のパートでは、基本的に、オンライン授業で学生の生活リズムが変化したかどうかを調べた。より具体的にいうならば、遠隔授業期間に何をして過ごしていたか、そして遠隔授業をどこで受けたか、遠隔授業を受けた際の学習環境は学生にとって適切であったか否か、さらに遠隔授業時辛いと感じたことがあるかどうか、辛いと感じたときそれにどう対処したか、について聞いてみた。

まず、「遠隔授業であなたの生活リズムに変化はありましたか」という質問に対する回答を見てみたい。回答は「あった」、「少しあった」、「あまりなかった」、「まったくなかった」の4択になっている。そのなかで一番多かったのは、「あまりなかった」だった（45件・44%）。これに「まったくなかった」（3件・3%）を加えると、約半分（48%）の学生がオンライン授業によって、生活リズムに変化が見られなかったことになる。変化が「あった」（23件・22%）あるいは「少し

あった」(31件・30%)の回答のうち、そのほとんどが「昼型から夜型になった」と答えている。以上のことから、オンライン授業によって約半分の学生の生活リズムが、昼型から夜型へと変わったことがわかる⁽⁷⁾。

つぎに「遠隔授業以外の時は何をして過ごしていましたか」という問いに対する回答を見てみよう。具体的に14の選択肢が設定され、そのなかから最大3つを選択してもらった。もっとも多かった回答は「ネットで動画を見る」であった(69件・67%)。2番目は「ゲーム」(46件・45%)で、3番目は「音楽鑑賞」(36件・35%)であった。それ以下は、多い方から「テレビを見る」(30件・29%)、「筋トレ・ダンス」(24件・23%)、「読書」(21件・20%)、「アルバイト」(20件・19%)、「友人と遊ぶ」(13件・13%)、「家族の手伝い」(11件・11%)、「音楽演奏」・「動物の世話」(ともに7件・6%)となっている。

以上2つの質問に対する回答を見て筆者が意外だったのは、「健康ブーム」のためか、新1年生の約半分の生活リズムを維持し、約4分の1の学生が「筋トレ・ダンス」などに励む姿が垣間見えてくることである。質問のなかでも「遠隔授業で一番楽しかったこと、面白いと思ったこと」は何かを問うた欄があるが、回答に「体育の授業で自宅でも体を動かすことができた」(Tさん)こと、「体育で久しぶりにラジオ体操をおどった」(Mさん)ことを挙げた学生がいた。

秋田大学の調査報告書「秋田大学学部生・大学院生こころとからだの調査」(2020年8月28日)では、自粛期間中に罹りやすい⁽⁸⁾うつ病に対する予防因子の1つとして「運動」を挙げている。以上を考慮するならば、自粛期間中オンライン授業のなかで体育・スポーツ科目が果たす役割はきわめて重要だといえる。

遠隔授業期間どこで勉強をしたか、オンライン授業を受けた場所についても質問した。その多くが「自宅だった」(67件・65%)と答え、つぎの「下宿だった」という回答が23件・22%であった。受講場所が「自宅だった」あるいは「下宿だった」学生が「勉強しやすかった」のか否かも、回答からわかる。

オンライン授業の期間、自宅あるいは下宿で勉強し、受講していた学生のうち、勉強「しやすかった」あるいは「まあしやすかった」という回答は、70件・68%に上った。この数字が正確ならば、自宅あるいは下宿で勉強をし、オンライン授業を受けることには、自宅・下宿ともに学習環境としては特段の問題はないと言える。

たとえば、「時間にしばられず好きな時間に勉強できたこと」（Kさん）、「自分の好きな時間に課題ができたこと」（Kさん）、「自分で時間配分ができたので、自分のペースで課題等を楽しく進められたこと」（Tさん）、「移動時間がなくなったこと」（Sさん）、「学校に行かなくても課題が提出できるし、これから遠隔授業で授業できるようになるかもと思った」（Mさん）などの肯定的な意見がいくつかあった。いずれもオンライン授業によって時間・空間の縛りから解放された点を評価している。

「遠隔授業時、辛いと思ったことはありますか」の問いに、もっとも多かった回答は「あまりない」である（42件・40%）。つぎに「ややある」が30件・29%、それに「ある」がつづく（18件・17%）。「まったくない」は、12件・12%だった。「ある」と「ややある」を合わせると46%に上る。約半数の新1年生にとって、遠隔授業は辛かったのである。

では、「つらい」あるいは「ややつらい」と回答した学生に、「どのように対応しましたか」と聞いてみた。もっとも多かったのが「友人に相談」である（19件・18%）。そのつぎに「だれにも相談せず我慢した」であった（14件・14%）。そのあとは「親に相談」（12件・12%）、「教員に相談」（9件・9%）の順になっている。

もっとも多い「友人に相談」の、ここでいう「友人」とは、同じ高校の出身者や同郷出身の友人、もしかして高校時代の友人のことかもしれない。オリエンテーションの短縮や、授業開始時点からオンライン授業しか受けていない新1年生は、友人を作る機会をもてなかったのではないだろうか。したがって、ここでいう友人は、大学で新しくできた友人ではないだろう（“友達ゼロ”）。

より詳しくいうならば、「だれにも相談せず我慢した」学生が一定数存在するのは、「大学で人と直接話さない→友達ができない→誰にも相談できない」（Tさん）という連鎖の結果だと考えられる。さらに付けくわえるなら、新1年生は大学の組織系統・管轄をよく知らないため、悩みをどこの誰に相談したらよいのかもわからず、不安を募らせたのではないだろうか。上でも触れた秋田大学の報告書では、“うつ病”のもう1つの予防因子として「相談できる人の存在」が重要だとしている（「運動」＋「相談できる存在」）。

遠隔授業期間で「どのような時に辛いと感じましたか」という問いに、学生はつぎのように答えている。「なかなか質問できる人がいなかった」（Kさん）、「周

りに課題について聞ける人がいなかった」(Mさん)、「1人で課題に取り組むのが不安だった」(Mさん)。

とくに新1年生に対しては、大学のなかにも、気軽に悩みを相談できる人・場所がぜひとも必要ではないか。この点はとりわけ強調しておきたい。

4. オンライン授業はつまらないか

「Ⅲ.遠隔授業の内容について」ではまず、「遠隔授業を受けてみての感想を選んで下さい(複数回答3つまで)」という質問の下、12の選択肢の中からチェックしてもらった。

そのなかでももっとも多かったのが、「心配なことがあった」である(46件・45%)。2番目は「難しかった」であり(42件・41%)、3番目は「新鮮だった」である(35件・34%)。それ以下は「楽しかった」(25件・24%)、「つまらなかった」(20件・19%)、「辛かった」(14件・14%)、「大学/教員の対応が親切だった」(11件・11%)となっている。「大学/教員の対応が不親切だった」は、1件だった。

想定どおりではあるが、やはり「心配なことがあった」と「難しかった」、それから「つまらなかった」が多い。オンライン授業全体の評価に関しては、九州大学の調査でも同様の結果が出ている。「授業がつまらなかった」と答えた学生は、学年別に見れば、新1年生は35%、2～4年生は25%となっている。九州大学の新1年生の3人に1人強が、オンライン授業は「つまらなかった」と感じたのである⁽⁹⁾。

その反面本学の調査では、「新鮮だった」(34%)、「楽しかった」(24%)と答えた学生も少なくない。それから、選択肢のなかから「つまらなかった」と同時に「楽しかった」を選択した学生も一定数存在する。「つらかった」と「難しかった」にチェックを入れながら、同時に「新鮮だった」を選択した学生もいる。これらの回答から、オンライン授業に対する学生のアンビヴァレントな心情を窺い知ることができる。そして、オンライン授業そのものを単に「おもしろかった」/「つまらなかった」に二分化して評価することは、あまり意味のないことだということがわかる。

アンケートの最後の質問は「今後の遠隔授業について何か希望はありますか

（複数回答3つまで）」というもので、これには選択肢が7つ設定してある。回答の多かった順から挙げていくと、もっとも多かったのが「全体的に課題が多すぎるので、減らして欲しい」（59件・57%）だった。2番目に多かったのは「自宅で勉強しやすいようなテキストと課題を工夫してほしい」（47件・46%）で、3番目が「課題提出後に、すぐにコメントと評価を送って欲しい」（38件・37%）だった。以下「ZOOMといった同時性が高く、会話も可能な動画講義を増やして欲しい」（23件・22%）、「教員・仲間と会話できるチャット機能のある講義をして欲しい」（15件・15%）の順となっている（以下省略）。

もっとも回答が多かった「全体的に課題が多すぎるので、減らして欲しい」という声に関しては、立命館大学新聞社の調査でも「自由記述では、『課題が多すぎる』という回答が最も多く」見られると報告されている。⁽¹⁰⁾ 課題が多くなった理由はおそらく、以下のようなことだったのではないかと推測する。

教員側は、レジュメを出すだけ、あるいは教科書の読むべき頁を指示するだけでは、学生は能動的に勉強しないだろう、レポート提出（1,200から2,000字程度）なり、調べ学習・報告なりさせて、学生が内容を理解しているか否か、反応を見たい、確認したい。大体、このようなことだったのではなかろうか。それを学生側からすると、毎週10科目以上分の課題が出されることになり（「次から次へと課題が出され続けた」Sさん）、許容量を超えてしまったと考えられる。

つぎに多かった「自宅で勉強しやすいようなテキストと課題を工夫してほしい」という要望については、教員は今後、このような回答者の声を生かして、オンライン授業に相応しい教材の開発や課題の出し方を工夫していかななくてはならないだろう。⁽¹¹⁾ この点に関しては、九州大学が同様の質問をしている。「学生がオンライン授業を集中して受けられる意図的な工夫がなされていた」に対し、新1年生は17%が、2～4年生は19%が肯定的に回答した。言いかえるならば、九州大学の8割強の学生が、オンライン授業のために何らかの工夫がなされているとは感じなかったということだ。教員にとって、きわめて厳しい調査結果である。

通常の対面授業では、レジュメや資料を配布したり、パワーポイントを使ったりして、講義内容を口頭で詳しく説明していくのが一般的だ。だがポータルやmoodleでは、相当工夫しなくてはこの部分を補うことができない。この点は、大いに改善の余地があるだろう。

筆者は、レジュメ・資料等を予めダウンロードできるようにしておいて、ZOOMを使って授業をする方法がよいのではなかと考える。ZOOMなら、口頭での説明が可能になる。また、質疑・応答も可能だ。アンケートの自由記述欄には、「ZOOMが楽しかった」(Hさん)、「ZOOMは、先生や一緒に授業を受けている人の顔を見ることができたので、楽しかったです」(Kさん)、遠隔授業期間中「ZOOMの授業で人の顔を見て話せたこと」が一番楽しかった(Mさん)、といった自由記述が30件ほど見られる。その中でもZOOMを使った英語の授業が楽しかったという回答が、約3分の1(11件)に上っている。英語(“英会話”だと思われる)の授業はとりわけ、ZOOMとの相性がよいようだ。

それと関連して、オンライン授業の方法を統一してほしいという要望も挙がっている。「遠隔授業の授業方法を統一してほしい」(Kさん)や、「LMSとポータルサイト、メール、LINEと分かれていて大変だったため、課題や動画、連絡など、一つのサイトに統一してほしい」(Mさん)などである。各授業でコミュニケーションの手段が異なり、学生はその度にセッティングに追われたことが推察される。混乱を避けるためにも、そして効率のためにも、授業方法の統一は不可欠だろう。

それから、「課題提出後に、すぐにコメントと評価を送って欲しい」という要望についてであるが、この点に関しては、筆者は“学生への返信に追われている”と訴えていた教員を何人か知っている。教員もすぐにコメントと評価を送りたいところであろうが、教員側も初めてのオンライン授業で自転車操業状態だったと考えられる。

普段なら何でもないことかもしれないが、コロナ渦のなか教員からのリアクションがないとき、学生たちは放逐されたような気分になり、不安感や孤独感を増幅させたことが窺われる。「メールでの課題提出ができていないか、何の反応もない先生がいて不安だった」(Kさん)、「課題が出せているのかという不安でいっぱいだった」(Kさん)、「一部、質問のメールを送っても返信がない教科があって不安しかなかった」(Aさん)など。何らかの方策が考えられなくてはならないだろうが、これは、学生が課題を提出した際には自動的に確認メールが送還されるなど、技術的な解決が可能ではないだろうか。

以上は主として教員に対する要求だといってよいだろう。

5. 他大学のアンケート結果から

朝日新聞の記事「オンライン講義 課題と手応え」によると、国公立の768大学を調査したところ（朝日新聞と河合塾による）、7月時点で全授業の80%以上をオンラインで実施する大学が7割に上ったことがわかる⁽¹³⁾。そして、オンライン授業の「課題」として挙げられた点は、「実験・実習・実技系科目への対応」がもっとも多く（56%）、それから「学生の通信環境・ICT（情報通信技術）スキル」、「学生の学ぶ意欲・メンタルケア」と続いている。本稿が基づいているアンケートは1回生の導入教育（「初年次基礎演習A I」）の受講生を対象にしているため、今回のアンケート結果からは「実験・実習・実技系科目への対応」の困難を読みとることができないが、スポーツや演劇、福祉の実習等に関わるオンライン講義の困難は想像に難くない（この点に関しては、北川論文、近藤論文、仙石論文を見よ）。

秋田大学の報告からは、学生が置かれている深刻な状況を見てとることができる。同大学による調査結果によると、約1割の学生が「うつ症状」に悩まされていることが明らかになった。この調査は秋田大学のものだが、社会全体を閉塞感が覆いつくすなか、いずれの大学にも「うつ症状」を帯びた学生が一定数存在することが想定される（「コロナうつ」）。大学に来なくなったとか、授業に出席しなくなったとか、多くの単位を落としてしまったとかいったことを、単に本人の「学習意欲の減退」や「生活の乱れ」などといった表面的な原因に帰属させてしまうと、本当の原因を把握しそこなうおそれがある。この点は、要注意である。

警視庁の統計によると、2020年8月時点での自殺者は1,849人に上り、昨年と同時期よりも246人多いという。とくに20歳未満の女性の自殺者数は、前年同月の3.6倍に上がるという⁽¹⁴⁾。各方面でコロナ禍の影響が噴出しはじめている。いずれの大学でも、今後の追跡調査と学生の心のケアの双方が欠かせないだろう。

それから、九州大学がおこなった調査で興味深い結果が報告されている⁽¹⁵⁾。新1年生と2年生以上では、オンライン授業に対する評価が、大きく異なっているという。「オンライン授業は対面授業を代替できていたと思いますか」という質問に対し、新1年生は26%が「できていなかった」と答えた（「できていた」・20%）。他方、2年生～4年生は11%が「できていなかった」と回答した（「できていた」・

53%)。オンライン授業に関しては、新1年生の方が2～4年生よりも、はるかに否定的な評価を下している⁽¹⁶⁾のである。

それには以下のような理由が考えられる。すでに1年以上授業を受けた経験のある2年生以上と、オリエンテーションのみしか受けていない、つまり大学の授業というものをまったく経験していない新1年生とでは、講義というものに対する認識がまったく異なっているのではないだろうか。

新1年生はおそらく、わずかに数日しか登校できていないため("リアル授業ゼロ")、大学の講義というものがそもそもどのようなものなのか、概念・イメージを形成できなかったはずだ。そのため彼らは、オンライン授業を経験してみて大学の講義というものに一自分が抱いていた期待と現実との落差に一幻滅したのではないか。これに2～4年生の方がオンライン授業をより肯定的に捉えている点を加味すれば、新1年生による低評価は、オンライン授業と対面授業との落差によるというより、大学の講義というものに対する期待と現実の講義との落差によるといった方がよいだろう。あくまでも、オンライン授業は落差を増幅させただけではないだろうか。

以上、他大学によるアンケート調査の結果から主要な点のみを紹介したが、いずれの大学にも同様の傾向が見られることだろう。他大学の調査結果から学べることは、積極的に学びたい。

5. おわりに

今回のアンケート結果とその分析から、主として以下のことが明らかになった。①学生は必ずしもオンライン授業を忌避しているわけではないということ、楽しかった・新鮮だったと感じる学生も少なからずいるということ、②四国学院大学の新1年生には、moodleよりもZOOMの方が好まれているということ、③教員はオンライン授業用に特別に、テキスト作成・使用や課題の出し方を工夫し改善すべきだということ、④学生が課題を提出した際、教員からのレスポンスがないと、多くの学生がかなり不安を募らせるということ、⑤オンライン授業で学生が使用する機器は主として、スマートフォンである可能性が高いということ、⑥ワードで文書作成ができない・うまく作成できない学生が25%存在するということ。

以上である。

まず何をにおいても優先されるべきは、事態を正確に把握することだろう。⁽¹⁷⁾何事も現状の認識なくしてははじまらないと、筆者は考える。理解することは、問題解決への第一歩であるからだ。そのためには、学生と教員の双方に対してアンケート調査をおこなうのも一つの方法だろう。筆者も4月以降、新1年生と接してきたが、今回のアンケートによってまったく予想さえしなかった回答に直面し、認識を改めざるをえなかった。

ドイツのメルケル首相が"戦後最大の試練"と述べたように、今回のコロナウイルス感染の拡大・蔓延は、大学・教職員にとっても不測の事態である。おそらく国内の大学だけでなく世界中の大学が同様の混沌のなか、手探りで諸般の出来事に対応しなくてはならなかっただろう。このような状況のなか、大学の対応の不手際^{あげつら}を論うことは簡単だ。そんなことは誰でもできる。それよりも批判されるべきは、今回の経験から学ぼうとしない態度であろう。"喉元過ぎれば熱さを忘れる"が、一番よくない。第一波が過ぎさり、日本国内では第二波がピークを超えたかに見える今こそ、事態を冷静に反省すべきときではないか。すでにわれわれは二度の波を経験した。二度あることは三度あるという。

注・参考資料・URL

- (1) 四国学院大学は6月1日以降、全授業を対面式に移行させたわけではない。社会的距離確保のため、比較的受講生が少ない授業を移行の対象にした。それ以外に受講生が多い講義や、教員が希望する場合、引きつづきオンライン授業がおこなわれた。対面授業の際の対策として、教職員・学生ともにマスク必着、各校舎の入り口には消毒液が置かれ各自手指消毒の実行、体調がよくない場合検温の実施、それから自宅待機、全学の窓・扉の開放が遂行された。また、喉の痛みがある/ない、微熱がある/ないなどチェック項目が示され、登校可能/不可能の基準が明示された。教室では、学生同士が社会的距離（social distance）を確保できるよう、それぞれの講義ごとに着席表を作成し、どの席に誰が座るか、指定された。そうすることによって、クラスターが発生した場合、あとで特定することができるよう配慮がなされた。教職員に対しても「新型コロナウイルス感染症への対策について」などで、数次にわたって行動のガイドラインが設定・変更された。

- (2) アンケート用紙は、四国学院大学社会学部教授・関泰子^{ひろこ}氏が作成した。関教授は自身が担当されているクラス用にアンケート用紙を作成された。筆者は、関教授が作成されたアンケート用紙の使用許可をえて、独自に配布・回収・分析をおこなった。その分析結果を纏めたものが、本報告である。したがって、本稿の責任はすべて筆者にある。アンケート用紙の使用許可を与えてくださった関教授に、この場を借りて感謝を述べたい。
- (3) アンケートの配布と回収に関しては、片岡信之、北川裕美子、近藤剛、斎藤学、関泰子、仙石桂子、ネルソン・ジョシュア、各先生にご協力いただいた。この場を借りて謝意を表したい。
- (4) ここで注意すべきは、質問は機器の「使用」についてのものであり、「所有」についてではないということである。そういった意味では、この回答は、使用機器についての新1年生たちの選好を示していると理解すべきである。パソコン等機器の選好の問題とその所有/非所有の問題は(“インフラ格差”)、一旦区別して考えた方がよいだろう。
- (5) 自由記述の欄に辛かったこととして、「パソコンの使い方がわからない」(Fさん)、「パソコンの使い方が分からなくて、どう提出すればいいか分からなかったこと」(Tさん)と回答した学生や、「パソコンを使うことがあまりなく、使い方があまり分からなかった時」(Tさん)に辛かったと書いた学生が一定程度いた。
- (6) 「ポータルサイトやLMSの説明をしっかりとってほしかったです」(Oさん)、「ムードルやポータルサイトのあつかい方の説明がほしかった」(Mさん)、「LMSの使い方やLMSを使って課題を送ること」が辛かった、と書いた学生が幾人かいた。それから「やはり2、3月の時点で、仮でも良いから遠隔授業になるかもしれないということを伝えて、その講習をしてほしかったです」(Iさん)という意見もあった。いずれにせよ大学は一殊に1年生に対しては一、ポータルサイトやLMS、ZOOMに関する講習をおこなうべきだろう。
- (7) 立命館大学新聞社のアンケート調査結果(「コロナ禍における学生生活実態調査」2020年7月1日)によると、学生(1年生以上のすべての学年)に「現在、昼夜逆転現象は起きていますか」と質問したところ、22%が「起きている」、42%が「やや起きている」、そして36%が「全く起きていない」と回答した。同大学の6割強の学生に、昼夜逆転が起きたことがわかる(<https://ritsumeikanunivpress.com/>)。
- (8) 秋田大学のアンケート調査結果は「秋田大学学部生・大学院生ところとからだの調査」(2020年8月28日)で見ることができる(<https://www.akita-u.ac.jp/>)。
- (9) 「九州大学のオンライン授業に関する学生アンケート(春学期)結果について」2020年8月11日)を参考にした(<https://www.kyushu-u.ac.jp/>)。

(10) 立命館大学新聞社、同上。

(11) 学生がワードを使った文書作成ができない・困難だという問題とは別に、新1年生はそもそもレポートや論文の書き方をわかっていないという問題がある。「レポートの書き方が分からない」（Kさん）、「レポートの書き方がわからなかった」（Sさん）、「レポートの書き方がわからないのにたくさん書かされた。書き方がわからないのに多すぎる」（Tさん）。新1年生は、レポートや論文の書き方を教えられていない。オンライン授業におけるレポート提出等、課題の内容も、それを前提にして調整されるべきだったであろう。この点も重ねて強調しておきたい。

(12) 逆に、辛かったこととして「顔を出さなくてはならなかったこと」（Mさん）や、「ZOOMを使った授業で顔を出さなくてはならなかったときに苦痛でした」（Iさん）と書いた学生も幾人かいた。

(13) 朝日新聞、2020年8月24日、朝刊。

(14) 朝日新聞、2020年10月25日、朝刊。

(15) 九州大学、同上。

(16) 立命館大学の調査結果にも、同様の傾向が見られる。「秋学期もWeb授業が継続されるとなれば 賛成ですか、反対ですか」の問いに、新1年生は約36%が「賛成」・「どちらかといえば賛成」であるのに対し、4年生は約45%が「賛成」・「どちらかといえば賛成」である。学年が上がるにつれ、「賛成」・「どちらかといえば賛成」の割合が増えている。逆に、学年が下がるにつれ、「反対」・「どちらかといえば反対」の割合が増えている。

(17) 2020年10月11日の朝日新聞（朝刊）に「コロナ禍で『教育格差の拡大に拍車』」という記事が掲載されている。それによると（三菱UFJリサーチ&コンサルティング社調査）、年収400万円未満の子どもがいる世帯では3割強が、ひとり親世帯では3割弱がパソコンやタブレット端末をもっていないことが判明したという。今回は調べられなかったが、筆者は機器の選好の問題より、パソコンの所有／非所有の問題の方がより根本的だと考える。オンライン授業をおこなう大学は、全学生におけるPC所有／非所有を正確に把握し、基本的なPC環境整備のための積極的な経済的支援をおこなうべきだ。自由記述欄に、コロナ禍で「アルバイトがなくなってお金の面で困っていたのに〔“バイトゼロ”〕、遠隔授業ができるように環境を整えろは無理です」（Fさん）と書いた学生がいた。コロナ禍が経済格差を拡大させているなか、これは聞き流すことのできない、切実な訴えだ。